

令和元年6月3日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K18194

研究課題名(和文) 第一次世界大戦直後のドイツにみる住宅困窮期における新しい郷土像の追求に関する研究

研究課題名(英文) Study on the new images of home pursued during the housing crisis period in Germany immediately after World War I.

研究代表者

山本 一貴 (YAMAMOTO, Kazuki)

神戸大学・工学研究科・工学研究科研究員

研究者番号：90533977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一次世界大戦直後の住宅困窮期におけるドイツで住宅建設をめぐる追求された新しい郷土像を明らかにすることを目的とするものである。立場の異なる建築家や組織が提示する理念と手法、それを基礎に応用したとされる実際の計画やその現況を分析し、新しい郷土像について、理念・手法とその形成過程、そして建築空間像を考察した。本研究を通じて、近代化の現実を受けとめる立場から、都市部で働く人々の住まいに、健康的な家庭生活を営む居心地のよい場所の意味で、「郷土」の感覚をつくり出すことが主題化されたことの実態の一端が把握された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で扱った第一次世界大戦直後の時期は、戦前の住宅改革運動や田園都市運動における議論の成果と反省を踏まえて、大戦直後の、建設活動の停滞期ながらも、住宅需要の増大を受けて新たな展開を示す時期であり、その後の大量生産期や近代建築運動までを見通す、住宅・都市の史的展開の一端が明らかになったことに意義がある。また、本研究が着目する郷土という主題は、都市と農村、近代と伝統、定住と移動との間に立ち上がる、時代を越えた普遍的な主題であり、現代社会の課題にとっても示唆に富む実り豊かな研究となった。

研究成果の概要(英文)：The purpose to this study is to clarify the new image of home pursued during the housing crisis period in Germany immediately after World War I. Following results were derived through the analysis of ideas and methods of planning for housing estate presented by architects and organizations and the examination of their actual works. Some architects faced the reality of modernization and urbanization. When they designed housing estate for people who worked and lived in urban areas, they pursued to create a sense of "home" and "hometown" as a comfortable place to lead a healthy family life.

研究分野：建築学

キーワード：モダニズム 故郷 家庭 ジールドルンク 工業化 セルフビルド 田園都市 倭約

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦後のワイマール期ドイツには、ジードルンクと呼ばれる住宅団地が数多く建設された。ドコモモに選定されるなど近代建築運動の成果を示すものとしてよく知られている。どのような理念と方法によって建設が進められてきたかは、国際的にも広く影響を及ぼしただけに、多くの関心を集める研究課題である。

注目されるのは第一次世界大戦直後の時代である。戦時以来の政治経済の情勢不安定を受けて資金・物資に乏しく、建設活動が停滞していた時期であるが、結婚ブームなどによる住宅需要の増大を受けて、住宅建設に向けて各方面から活発な議論がなされた時期である。いわばおその後の建設活動の再開に向けた準備期間である。それにも拘らず、当時何がどのように議論されたかについては、十分な注意が払われてきたとは言いがたい。

報告者は、第一次世界大戦直後に刊行された、建築家が安価で良質な住宅の建設方式を具体的に提案する著作に焦点を当て、その計画理念と方法を明らかにし、歴史的に位置づけることをめざす研究に取り組んできた。これまでに考察対象としたのはP・ベーレンスとH・デ・フリースの共著『儉約建設について』(1918)とデ・フリースの単著『未来の住宅都市』(1919)である。また、その歴史的な位置を相対的に考察しようと、全国儉約建設方法振興連盟という団体がA・アンカーに編著を委託した『自然建設方法』(1919)についても分析を進めてきた。開発地、住居・住棟・住区の型式、庭、建築美に関する考え方やその具体的な方法について考察をしてきた。

この研究を進める中で、大戦直後の当時、安価で良質な建設方式の開発と同時に、近代化に伴う都市化により大都市に流入してきた労働者とその家族の間に広がる郷土喪失感に対して、どのように問題解決すべきかが議論され、旧来の郷土芸術運動や郷土保護運動の場合とは性格を異にする、新しい郷土像が追求されていたことが次第に分かってきた。

今後、各著作の原典資料等の文献調査による理論形成の分析や、実際の居住地への応用事例等の現地調査による建築空間像の分析を通じて、大戦直後の住宅困窮期にドイツの建築家たちが郷土について何をどのように議論し、どのようにかたちにしようとしたかをいっそう明らかにすることで、住宅・都市の史的展開に対する新たな視座の獲得が期待され、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究は、第一次世界大戦直後の住宅困窮期におけるドイツで住宅建設をめぐる追求された新しい郷土像を明らかにすることを目的とするものである。立場の異なる建築家や組織が提示する、理念と方法、それを基礎に適用したとされる実際の計画やその現況を分析することにより、新しい郷土像について、議論の背景を含め、理念と方法の特質とその形成過程そして建築空間像を把握することで、住宅・都市の史的展開の実態解明に対する新しい視座の獲得を目指す。

具体的には、研究期間内に、次のことを明らかにするという計画を立てた。[1] 全国儉約建設方法振興連盟という団体がA・アンカーに編著を委託した『自然建設方法』(1919)の理論形成と建築空間像：[1-1] 原典資料との比較にみる、『自然建設方法』の住宅建設の理念・方法とその形成過程、[1-2] 出版を企画した全国建設方法振興連盟における議論から実践に至る活動内容と郷土のあり方に対する見解、[1-3] 出版に際して協力を受けたドイツ農村福祉及び郷土育成協会との関係、[1-4] 『自然建設方法』が示す理念・方法と儉約連盟の実践的活動に対する同時代の反応、[2] P・ベーレンスとH・デ・フリースの共著『儉約建設について』(1918)の理論形成と建築空間像：[2-1] 原典資料との比較にみる、『儉約建設について』の住宅建設の理念・方法とその形成過程、[2-2] 同時代のジードルンク思潮と郷土のあり方に対するベーレンスの見解、[2-3] 応用的実践例とされるAEG社ジードルンク計画とその現況、[2-4] 『儉約建設について』が示す理念・方法とその実践的事例に対する同時代の反応、[3] デ・フリースの単著『未来の住宅都市』(1919)の理論形成と建築空間像の把握：[3-1] 原典資料との比較にみる、『未来の住宅都市』の住宅建設の理念・方法とその形成過程、[3-2] 同時代のジードルンク思潮と郷土のあり方に対するデ・フリースの見解、[3-3] 応用的実践例とされるドイツ工作連盟ジードルンク住宅案並びにライヒスハイムシュテテン・ジードルンク計画とその現況、[3-4] 『未来の住宅都市』が示す理念・方法とその実践的事例に対する同時代の反応。

3. 研究の方法

第一次世界大戦直後の住宅困窮期のドイツで追求された新しい郷土像を明らかにするため、『自然建設方法』、『儉約建設について』、そして『未来の住宅都市』の3著作を中心に、[ステップ1] 原典資料や同時代の雑誌記事を含む当時の文献資料を新たに調査・収集し、3著作に見られる理念と方法そしてその形成過程との関連を抽出し、分析する。[ステップ2] それぞれの理念と方法を基本に、実際の住宅建設やその計画への応用事例について、現地を調査し、建築資料とともに具体的な建築空間像を分析する。[ステップ3] 文献資料調査そして現地調査に基づく分析により得られた知見を総合し、住宅建設における郷土について、何がどのように議論され、どのようにかたちにされようとしたかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 研究実績

4 年間の補助事業期間に達成することのできた研究実績を以下に示す。

2015 年度は、『自然建設方法』、『儉約建設について』、そして『未来の住宅都市』で示される理念と手法がどのような議論の背景のもと、何を論拠として形づくられたか、そしてどのような議論を呼んだかについて、各著作で言及される原典資料や同時代の関連図書及び雑誌記事等の文献資料を調査・収集し、理論・手法の形成過程の分析を進めた。2015 年 9 月から 10 月にかけてドイツに渡航し、ベルリン国立図書館及びベルリン工科大学図書館等にて文献資料の調査・収集を実施した。併せて、各著作で示される理念と手法を実際の住宅建設計画への応用に関し、実例の現況と具体的な建築空間像の予備的把握を行うため、ベルリン及びデュッセルドルフにて現地調査を実施した。また、『未来の住宅都市』で示される理念・手法の実際の計画への展開について、その成果の一部を研究論文にまとめ、学会発表した。

2016 年度は、『自然建設方法』、『儉約建設について』、そして『未来の住宅都市』で示される理念と手法がどのような議論の背景のもと、何を論拠として形づくられたか、そしてどのような議論を呼んだかについて、各著作で言及される原典資料や同時代の関連図書及び雑誌記事等、昨年度のドイツの諸機関で調査・収集できた文献資料を用いて、理論・手法の形成過程の分析を進めた。また、『自然建設方法』の出版を企画した組織として注目される全国建設方法振興連盟の活動内容について、昨年度の調査により収集できた文献資料を用いて整理を進めた。そして、各著作で示される理念と手法の実際の住宅建設計画への応用に関し、昨年度に予備的に実施した現地調査とこれまでに収集した文献資料の分析をもとに、建築家たちが実際の住宅・住宅地建設に対してその理念と方法をどのように応用し、どのようなかたちにまとめたか、具体的な建築空間像の把握を進めた。

2017 年度は、『自然建設方法』、『儉約建設について』、そして『未来の住宅都市』で示される理念と手法がどのような議論の背景のもと、何を論拠として形づくられたか、そしてどのような議論を呼んだかについて、各著作で言及される原典資料や同時代の関連図書及び雑誌記事等の文献資料を追加調査・収集し、理論・手法の形成過程の分析を進めた。2017 年 10 月から 11 月にかけてドイツに渡航し、ベルリン港区立図書館及びベルリン工科大学図書館等にて文献資料の調査・収集を実施した。そのなかで、新しい郷土像の追求との関連性を指摘しうる議論の一端が、複数の同時代の雑誌（『Die Bauwelt』、『Der Staedtebau』）に見られたことから、大戦の始まる 1914 年まで遡って関係記事の調査・収集を実施した。他方で、ベルリン、フランクフルト等にて現地調査を実施し、文献資料により得られた知見の検証と建築空間像の把握を進めた。また、これからの郷土としてのまちと若者との関わりをめぐって、課題を議論し共有する機会を得て、研究成果の一部を発表した。

2018 年度は、昨年度に引き続き、文献資料の調査に基づく理念・方法とその形成過程の分析そして現地調査に基づく具体的な建築空間像の分析を実施するとともに、得られた知見の総合を進めた。再びドイツに渡航し、昨年度の調査のなかで新しい郷土像の追求との関連性を指摘しうる議論の一端が見られた、複数の同時代の雑誌（『Die Bauwelt』、『Der Staedtebau』）を中心に、関係記事や関連文献の追加調査・収集を、ベルリン国立図書館及びベルリン工科大学図書館等にて行うとともに、ベルリンと周辺諸都市において住宅地の現地調査を実施した。こうして得られた知見の総合を通じて、近代化の現実を受けとめる立場から、都市部で働く人々の生活を考慮して、できる限り都市の近くに住宅地を開発するとともに、健康的な家庭生活を営む居心地の良い場所の意味で、都市部の住まいに「郷土」の感覚をつくり出すことが主題化されたことの実態の一端を把握することができた。また、ドイツでの同時代の議論のヨーロッパ周辺諸国や日本への展開の観点から、住宅地の計画理念や手法、建築の様式や思潮の日本での理解を読み解くことにより、研究成果の一部をまとめる機会を得るとともに、近代化に直面する中で郷土の感覚を呼び覚ますことの議論の相対化とその地球規模の広まりにつながる展望を獲得できた。

(2) 研究の主な成果

研究の主な成果を以下に示す。

新しい郷土像を追求する住宅建設の理念・手法とその実践

第一次世界大戦直後の当時、安価で良質な建設方式の開発と同時に、近代化に伴う都市化により大都市に流入してきた労働者とその家族の間に広がる郷土喪失感に対して、どのように問題解決すべきかが議論され、旧来の供芸術運動や郷土保護運動の場合とは生活を異にする、新しい郷土像を追求する傾向が見られる。郷土保護運動等が郷土の問題を扱ってきたことは周知の通りだが、それによってイメージされる郷土とは、近代化、都市化の反動として、地方性、伝統性のニュアンスが付加されて理解されてきた。『自然建設方法』は、その出版に郷土保護運動の関係団体が協力しているが、都市から離れた地方を開発地として主張する。一方、『儉約建設について』と『未来の住宅都市』は、都市で働く労働者の生活を考慮して、できる限り都市に近くすることを主張する。それに伴い、都市部の住まいに郷土感覚をつくり出すことを主題として掲げているのが特徴的である。

こうした新しい郷土像の追求の展開を辿るうえで注目されることにひとつに、『未来の住宅都市』を著したデ・フリースが、1920 年代後半になって発表した複数のゾードルンク計画がある。

そのなかには現在もなお住居として利用されている住宅団地も含まれている。そこで、デ・フリースによる1920年代後半の一連のジードルンク計画を考察対象に、『未来の住宅都市』で提出した理念と手法が実際の空間形成にいかに応用されているかを明らかにすることを目的に研究をおこない、論考にまとめた。

基礎となる住宅建設の理念・手法、そして郷土に関する考え方は、『未来の住宅都市』によると次の通りである。『未来の住宅都市』は、従来いわゆる「賃貸兵舎」に暮らしていたような、好むと好まざるとに拘らず、大都市に住む多くの人々の居住環境に関して、大都市の中心部でも彼らの手の届く良質で安価な小住居を供給することを喫緊の課題と認識し、その解決を目指すとともに、都市部の人々の間に広がる郷土の喪失感に対して問題解決を図ろうとしたものである。具体的には、従来よりも階高を抑えつつも、二層分の大きな居間をもつメゾネット型住宅を提案するもので、それを積層させつつ南北方向に連なる住棟、これを並行に配置し、その間に広々とした空地をもつ住宅街区を提案するものであった。デ・フリースは、こうした空間形成を通して、大都市の住まいにおける郷土感覚の再生を目指したが、それは住まいが健全な家庭生活の場であるという感覚を再び呼び覚まそうとするもので、「静けさ」や「あたたかさ」、「喜び」を求めるものであった。郷土に関する同様の考え方がベーレンスとの共著『俟約建設について』にも見られる。

メゾネット型住宅の可能性の模索

メゾネット型住宅の可能性の模索が見られるのは、1927年に『Die Form』誌上に掲載された「メゾネット型住宅というテーマについて」と題するデ・フリースの論考である。その論考でデ・フリースは、『未来の住宅都市』で提案した基本的な理念と手法を再度概説するとともに、その発展形となる計画案を2つ発表している。いずれも住棟の並べ方や外部の庭との関係については示されていないが、住戸及び住棟の平面計画の展開を示すものとして注目される。1つは住戸の計画案である。『未来の住宅都市』での提案と同様に、上階に入口を持ち、下階に大きく吹き抜けた居間を設け、寝室となる3つの部屋をもつ計画である。異なるのは階段の位置である。かつて居間の隅にL字形に配置されていたが、廊下の外側に一直線に配置される。さらに住戸間に光庭らしきものが設けられ、階段や廊下部分の採光や換気が期待されていると考えられる。また階段の位置と形状の変更から廊下も短くなり、部屋の面積増大に活用されているように見える。もう1つは、住戸の連なり方が特徴的な計画案である。これについてデ・フリースは「ファサード概念をきっぱりと否定しつつ、植物的形象の生物学的形態に基づき、メゾネット型住宅を更に発展」させたものと位置づける。各住戸は、『未来の住宅都市』では住戸を貫く南北方向の廊下に対して東側あるいは西側のいずれか片側に同じ方向に並んでいたが、この計画案では、同様に南北方向に通路が走る一方で、植物の葉が一枚ずつ方向を違えて茎に付くように、方向を交互に変えて配置される。しかも各住戸は、東西から南方向に斜めに降って計画される。こうした手法の展開は、ファサード概念の否定に向けた造形上の大胆な刷新を図るものであるとともに、南面採光を重視するものであると考えられる。

メゾネット型住宅の応用

メゾネット型住宅の手法の実際の計画への応用がみられるのは、デ・フリースが1929年にドイツ西部のミュールハイムにおけるジードルンク計画である。これは、実現こそ至らなかったが、ミュールハイム市とドイツ工作連盟との共同で事業化されたモデルジードルンクの計画である。『Die Form』誌上に1929年に発表された論考によると、9名の建築家により20の独立住宅が計画され、うち2つがデ・フリースによる。計画地は丘陵で、南東方向が山側、北西方向が谷側になる。中央には南西から北東に向かって緩やかに高くなる勾配のある道路が通る。デ・フリースの敷地はいずれも山側を背にする斜面地であった。メゾネット型住宅の手法の応用が見られるのは、2つのうちの1つである。3層からなる住宅であるが、1階と主階の2階を吹き抜く大きな居間が南側に計画されている。2階にも設けられた居間は外部と接続し、庭や丘の景色も望める空間になっている。こうしたメゾネット型住宅の手法の応用をデ・フリースは積極的に行おうとしていたようであり、もう1つの住宅について、敷地の傾斜が比較的緩いためにメゾネット型を「断念」したと説明する。

「住まう喜び」の追求

デュッセルドルフ近郊のグレスハイムに建つジードルンクは、デ・フリースの設計により実現した計画である。ライヒスハイムシュテテン制度を用い、賃貸ではなく所有になるものである。全住戸数は101戸で、1930年7月から入居が開始された。現在もなお住居として利用されている。敷地は東西に長い長方形であり、南側の幹線道路よりも約25m高い位置にある。敷地の南部分に東西に1列に延びる住棟、北部分に南北方向に延びる7列の住棟が計画されている。敷地の北側には運動広場が計画されており、この広場と北部の住棟を取り囲むように、道路が計画されている。また、各住戸専用の庭も計画され、東西方向の住棟にはその南側に、南北方向の住棟にはその東側に配置されている。庭の一部は正方形に近い形状をしているが、細長い庭は、果樹を植えると、隣の庭に果実が落ちるおそれがあるので、できる限り避けるべきだとデ・フリースは主張し、『未来の住宅都市』や『俟約建設について』とも共通した、庭の実用性を重視する見解を示している。少なくとも3種類の住戸タイプが計画されたが、どのタイプも、2ないし3階建ての低層であり、『未来の住宅都市』で提案していたような高層住宅ではない。また、吹き抜け空間もなく、メゾネット型住宅の手法を応用したものとはいえない。南北方向を軸とした住棟だけでなく、東西方向を軸とした住棟をも計画している。しかし、外部の造形へ

のリズミカルで立体的な形態言語の使用に『未来の住宅都市』での提案との共通性が見出せる。

このようにゲレスハイムは、住戸タイプ等の細部の計画よりも、むしろ住棟と庭の配置や外部の造形等の全体の計画において『未来の住宅都市』と関係が深い。実は、デ・フリースはこのジードルンクを解説した論考を「都市計画の問題性」と題し、1930年に『Die Form』誌上に発表した。これは、自らのジードルンクを解説すると同時に、当時話題を集めていたダーマーシュトック・ジードルンクを論じることをテーマに据えていたことからくる。デ・フリースが「都市計画の問題性」として首尾一貫して問題視するのは、全体が兵舎に見えるような、人間らしさの欠落した機械的な造形表現である。ダーマーシュトック・ジードルンクに関して、定規で引いたような幾何学的造形を批判し、ゲレスハイム・ジードルンクの場合には地形に応じて緩やかな曲線を描いていることの優位を主張する。その有意性とは、デ・フリースによると、曲線を描くために道路に光が入り込むことにより、「生き生きとさせ、同時に高い住まう喜び[Wohnfreudigkeit]を授ける」ことにある。こうした「住まう喜び」に価値を置くことは、『未来の住宅都市』での「郷土」の主張と一致する。また、論考「都市計画の問題性」のなかで、住戸における家庭生活についての論考が見られることが注目される。ゲレスハイム・ジードルンクにおいて調理をする台所は居間と一体的に計画がなされている。こうした室の構成の採用を、デ・フリースは家庭生活の実態との関連で好ましいと指摘している。つまり、居間と台所を分離するのは、子供の面倒を見るには不向きであるなど、父、母、子、誰にとっても生活するうえで望ましくないし、小さな台所でさえ家族は集まって過ごすのを好むという実態である。このようにみると、ゲレスハイム・ジードルンクは、「住まう喜び」に価値を置いて計画されたという点、そして、健全な家庭生活を営む場を用意しようとしていた点で、デ・フリースが目指す「郷土」のかたちを示す重要な事例の1つであるといえる。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけと今後の展望

本研究の核心をなす問いは、住まいの近代化のなかで、「郷土」というものはどのように位置づけられ、追求されたかというものである。ここでいう「郷土」とは、ドイツ語でいうところの「Heimat」であり、英語でいうところの「hometown」に相当する。それゆえに、「Haus」や「house」では捉えきれない、「Heim」や「home」など、「住まい」に関する問いである。

近代における住宅問題に関する研究は数多あるが、「郷土」の扱われ方に関心を示すものに、『Vernacular Modernism: Heimat, Globalization and the Built Environment』(Stanford University Press, 2005)がある。これは、「ヴァナキュラー」を切り口に近代性の再考を企図する興味深い視点を含んだ論考集である。それに対して本研究を通じて得られた成果は、住宅建設の理念と手法、その実践に焦点を当てたもので、直接的に「郷土」の位置づけと近代性の再考につながるものとなった。

今後の展望を最後に示す。本研究期間内に資料の調査と分析を進めるなかで、特定の建築家や団体に焦点を当てるだけでなく、第一次世界大戦以前の19世紀末以降の住宅改良有働や田園都市運動から、1930年代初頭にかけての住宅問題と都市に関する国際的な議論に至るまでを、雑誌を用いて連続的に見ることも必要であることに気づいた。今後、新しい郷土像の追求に関する研究をさらに進める上で、『Die Bauwelt』、『Der Staedtebau』、『Der Baumeister』、『Stein, Holz, Eisen』等、複数の雑誌を基礎資料に、掲載記事による住宅問題の議論の経過と傾向、編集者の見解、またそれらによって提示される理念と手法、それを基礎に応用したと考えられる実際の計画や現況を分析することにより、20世紀前半のドイツにおいて、新しい郷土像に関して、何がどのように議論され、どのようなかたちが目指されたかをいっそう明らかにし、住宅・都市の史的展開の実態解明に対する新しい視座の獲得を目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11件)

塩谷沙織，山本一貴，中江研，近代オランダ建築に関する今井兼次の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈 その1 一致点について，日本建築学会大会学術講演梗概集，2019，2019，印刷中

山本一貴，塩谷沙織，中江研，近代オランダ建築に関する今井兼次の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈 その2 相違点について，日本建築学会大会学術講演梗概集，2019，2019，印刷中

塩谷沙織，中江研，山本一貴，近代オランダ建築に関する日本の建築系雑誌での最初期の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈，日本建築学会近畿支部研究報告集，59，2019，印刷中

菅原美咲，中江研，山本一貴，『セセッション圖案集 室内之部』各版の掲載内容について『セセッション圖案集』に関する研究 - その1 - ，日本建築学会近畿支部研究報告集，59，2019，印刷中

穴井万智，菅原美咲，中江研，山本一貴，『セセッション圖案集 外観之部』各版の掲載内容について『セセッション圖案集』に関する研究 - その2 - ，日本建築学会近畿支部研究報告集，59，2019，印刷中

山本一貴，幻の神戸市公会堂の建設計画と設計競技，神戸市史紀要「神戸の歴史」，査読有，27，2018，60-107

山本一貴, 中江研, ジードルンクの住居タイプに関する数量的関係の捉え方 山田守の『ジードルンク』と「生活最小限の住居」から, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2018, 2018, 927-928

塩谷沙織, 中江研, 山本一貴, 近代日本の建築メディアにおけるオランダ近代建築の掲載状況について, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 58, 2018, 517-520

山本一貴, 中江研, 住まいにおける新しい郷土像の展開 H・デ・フリースによる1920年代後半のドイツでの住宅建設計画を中心に, 神戸大学持続的住環境創成(積水ハウス)寄附講座平成27年度年報, 2016, 80-86

山本一貴, 中江研, 住まいにおける新しい郷土像の展開 H・デ・フリースによる1920年代後半のドイツでの住宅建設計画を中心に, 日本建築学会住宅系研究報告会論文集, 査読有, 10, 2015, 7-14

山本一貴, 中江研, H・デ・フリースによる1920年代後半のジードルンクの計画理念と手法, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2015, 2015, 193-194

〔学会発表〕(計 9 件)

塩谷沙織, 山本一貴, 中江研, 近代オランダ建築に関する今井兼次の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈 その1 一致点について, 2019年度日本建築学会大会(北陸)学術講演会, 2019

山本一貴, 塩谷沙織, 中江研, 近代オランダ建築に関する今井兼次の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈 その2 相違点について, 2019年度日本建築学会大会(北陸)学術講演会, 2019

塩谷沙織, 中江研, 山本一貴, 近代オランダ建築に関する日本の建築系雑誌での最初期の紹介におけるRobertsonの論考への依拠とその解釈, 2019年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2019

菅原美咲, 中江研, 山本一貴, 『セセッション圖案集 室内之部』各版の掲載内容について『セセッション圖案集』に関する研究 - その1 -, 2019年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2019

穴井万智, 菅原美咲, 中江研, 山本一貴, 『セセッション圖案集 外観之部』各版の掲載内容について『セセッション圖案集』に関する研究 - その2 -, 2019年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2019

山本一貴, 中江研, ジードルンクの住居タイプに関する数量的関係の捉え方 山田守の『ジードルンク』と「生活最小限の住居」から, 2018年度日本建築学会大会(東北)学術講演会, 2018

塩谷沙織, 中江研, 山本一貴, 近代日本の建築メディアにおけるオランダ近代建築の掲載状況について, 2018年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2018

山本一貴, まちの居心地, 地域プロフィールを知る会(南区ワカモノネットワーク), 招待講演, 2018

山本一貴, 中江研, H・デ・フリースによる1920年代後半のジードルンクの計画理念と手法, 2015年度日本建築学会大会(関東)学術講演会, 2015

〔その他〕

ホームページ等

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 持続的住環境創成講座

<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/eng-arch-sled/>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。